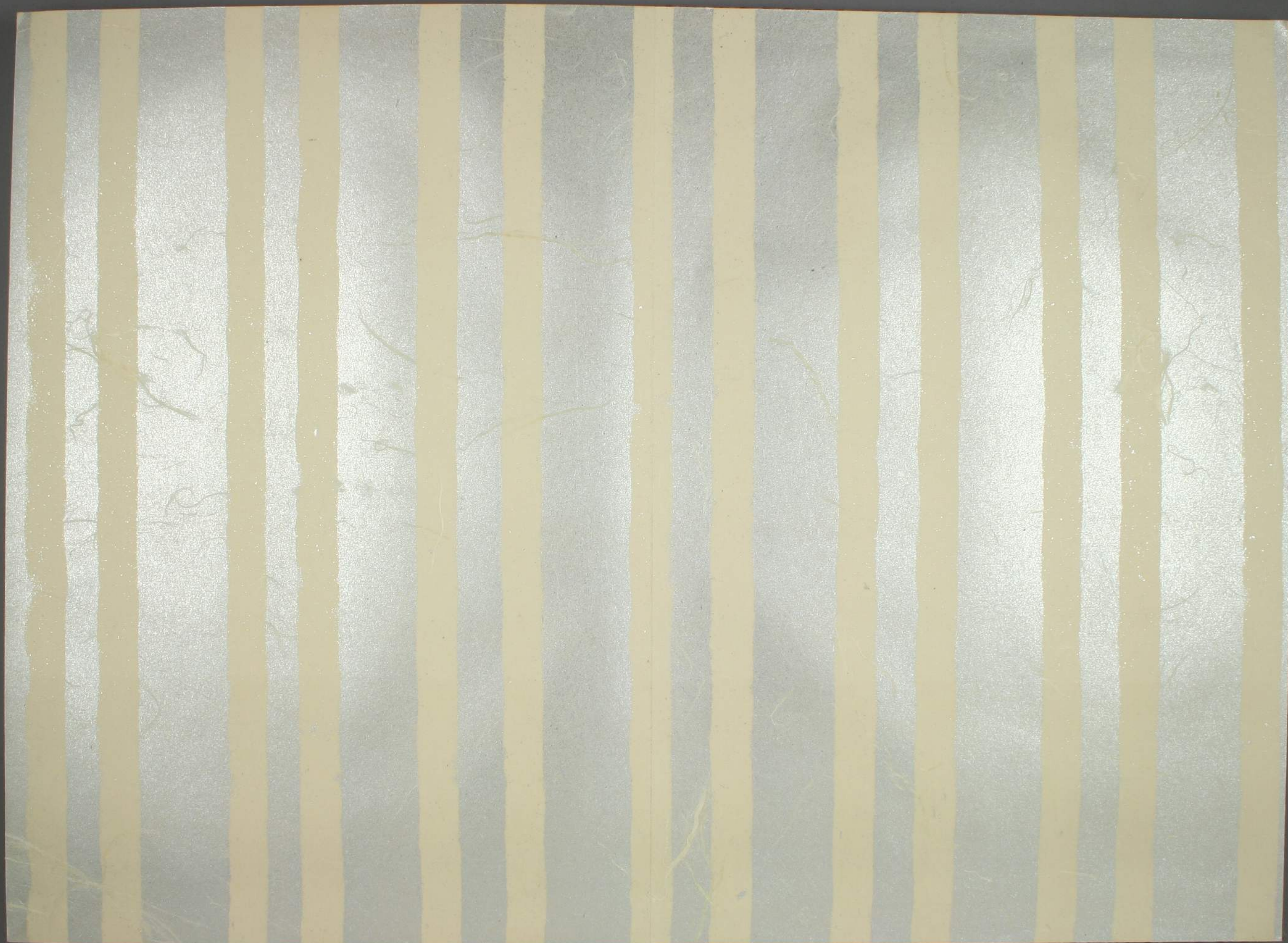




西遊文庫
文庫 10
8630





觀音靈驗記



和泉式部

西國三十三番の御代々の天子も御崇敬ありて行幸も
ありしなり小後白河院ち三十三度御参詣
遊ばる此時権現乃御神歌ふ
引傍よりとも移し入るる道なれば
是れ佛の御國なるに過ぎざり

此外一首の美言和泉
式部参詣のみ
あし兼み
障のりくれば
一鏡中なるなり
うき雲のふかき
月のけつとならむか
海トに伏も其夜の夢
月のけつとならむか
権現の御返歌のり

参詣を遂げ
奉りかた難
圓繪小出せり
万亭應賀誌

南亭真山在

觀音靈驗記



唐僧
威光上人

紀三井寺、三井の清水ありて、人々名をとり、上人、大般若經を、書写せしむる、人々忽然と、美女來りたる、ふ驚き、何方のものと尋ね、清水の滝の、うしろの、かき、其後三年、過つた、美女、又來りて、法螺貝、如意香炉、加葉の、錫杖、横道木、櫻等を、献じ、我々、龍女、あり、上人の、法徳を、永代、信仰せんと、去る、其の、品々、當寺の、宝物となし、その、もの、を、せん、せう、その、のみ、を、其、時、より、毎年、七月、七日、に、龍燈、を、献じ、る、こと、う、ぎ、に、靈、驗、あり

万亭應賀記

南溥貳山庄版

萬應園

横川彫竹

觀音靈驗記

西國順禮

第三番

粉河寺

免々乃

粉河寺

佛



澁川佐太夫

佐太夫河内の者

獨の子大病

困藥百計

一心み信

十四五の童

病ひを

尋ね

ゆゑ加持を頼

千手陀羅尼を

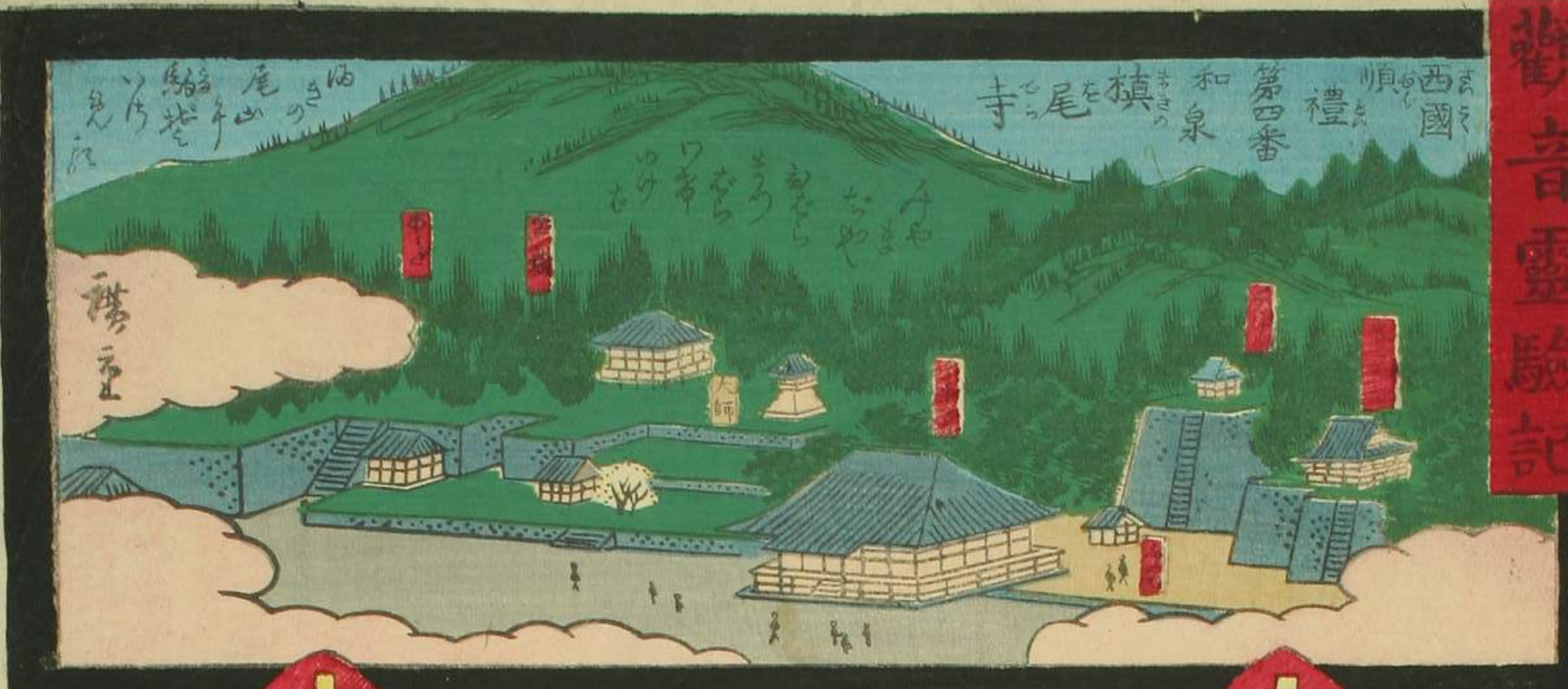


讀ゆえると俄み苦痛を免さしぬ
父歡ひく童小財寶を布施し
唯病人の箸紙を取て予ハ紀州粉河寺の者とのひ
去ら其後本腹一々れハ父子を連て其所をさるく尋ね
知まび人もあ草菴小休らひ終夜樂なるを思議と
仙間小光明輝きハ駭き近寄て見ま千手の御手み子ハ著
筒かり居され扱る以前の童ハ此御佛ハ在せりと深く尊ひ
と泰詣るこ四方ハ御佛ハ終伊都郡の女大信者とあり
住宅を御寺とせり其験除らるなり

万亭應賀誌

南傳馬貳山丁校

觀音靈驗記



光明皇后

嘗國は休々郡浦田小
 智海上人ゆつへあり宮里乃
 滝山よ仙樂信ト住
 老依少き藥未ゆ
 上人の尿を嘗
 孕み終み女子成
 産り上人見たま
 かく隣家乃
 姫ふ養育成

けをありし小元未食き農家ちれば
 かの女子七女の五月姫さあひの
 田の苗を植付居るし
 都より藤原不比等
 救願乃所使

あは巻尾寺ふ参詣ゆりしやち
 觀世音の靈端が夢り帰路千
 今かんは女子存見あり白皇の身なり光明
 放りい人俄み貴ひ姫ふ乞うを連立あり
 帝は御傍み侍せし名しき御寵愛
 あのゆりしは天平元年八月后宮子立あり

是光明皇后みゆり
 御身佛縁ありきかゆ名あはら
 佛法信しあり教多精舎を
 建立しありしこと不思議の靈驗あり

万亭應賀誌



南傳式

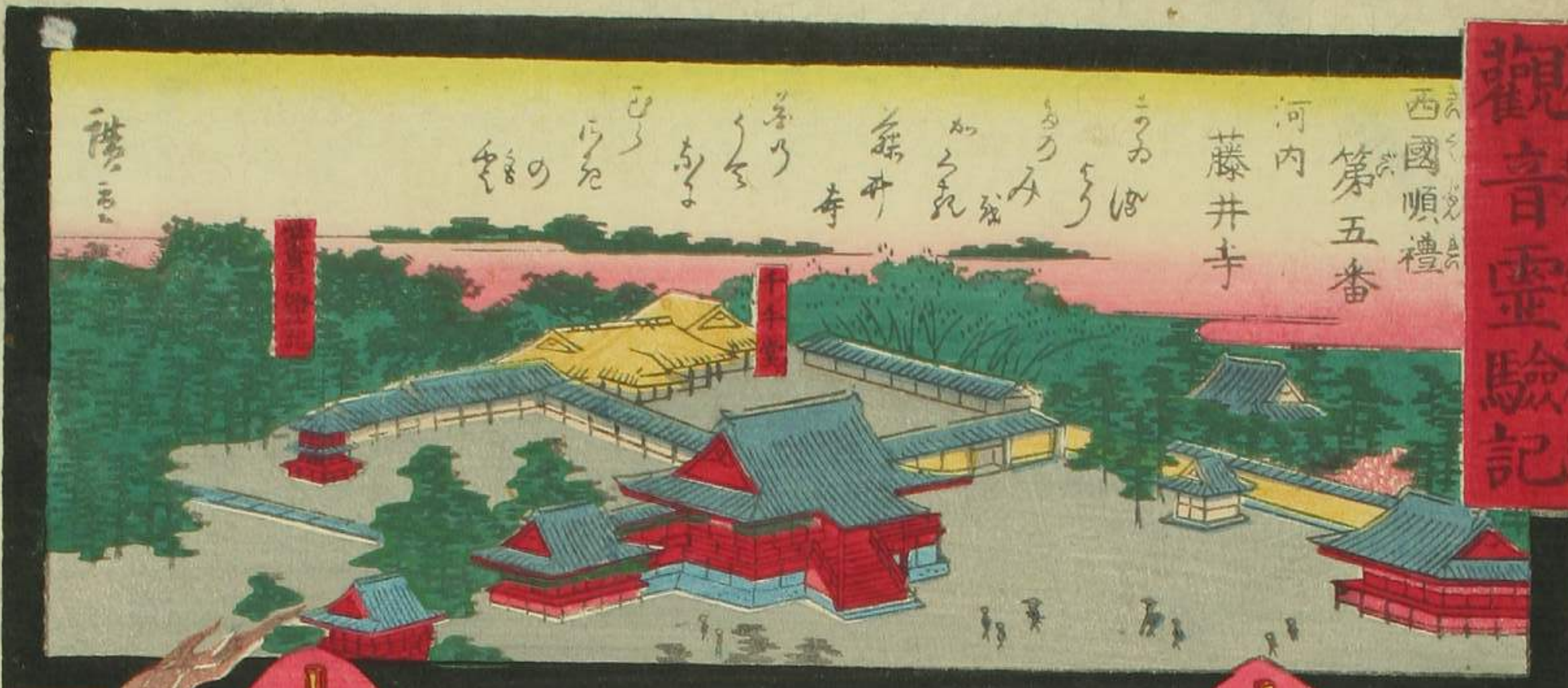
觀音靈驗記

西國順禮

第五番

河内

藤井寺



藤井安基

安基は、大和國賀留の里今を放埒邪見の者あり或時
河内國平石の邊み鹿を獵せり山の堂へ入て佛具を組板
薪とて其肉を煮て喰ひて死して大車に乗地獄の責めあつし
とて童子一人現はる是を救はんや獄卒も彼ハ仏道を穢せ逆罪の
者以て道とてと童子重ねて罪人とも彼ハ一度吾住長谷寺再建の
材木を引よる善根あり速に閻浮陀へ入ると聞へらく疾ふ活かり夫より
攻心と南都み登り行基菩薩の弟子とせん長谷觀音を
刺る天木の余り後めり此尊像と造りると聖武帝
聞いりて行基を以て阿基とせらる
安基が因縁よ藤井寺とせん
實ハ金剛寺とのみゆふ
不思議の天臉思見云



万亭
應賀誌

南子成山庄板

横川彫竹

觀音靈驗記



西國順禮 第六番
大和 壺坂寺
先代より
壺坂寺
浄土
の
光

本寺堂
岡山堂



西輕

雄略天皇廿三年帝
大安殿小在中た俄ふ
風雨雷電をひく
巫しをば隨身
小子部 栖輕ふ
詔しを汝急ぎ
雷神を捕り
来ししと

勅命を蒙り直ふ
馬を馳せ阿部山の
方小追行東さける
虚空を 白眼て吾朝の
空あり勅命を
知らぬやと大音
小罵りし

万亭應賀誌

是より
神取栖輕
と号たり

雷鳴上らば西輕
壺坂寺の方小
わづらひて觀
音菩薩

聖國

横川彫竹

應時
得消散と時念しなれば
御寺の方より異光と
めと見へるよらる
しら列は雷豊浦と
倉岡の間小落たるを
生捕て王
宮へ献ト
殿上人
賞せぬ者あり

南東 眞山 六板

觀音靈驗記



陸三王

梅理沙

西國 順禮 第七番 大和 岡寺

長門國の少女

本尊弘法大師入唐の時風波の大難を免さるる
 其の娘西國順禮をふく意しつ初せりぬ
 海上に難風小舟を碎れ兼合の人數残りて溺死
 せしが此少女のみふく其浦に伊弉諾と入
 牙ふあうりて漁父不助をらるる親の
 家へ送りられしは西親のあまきみ其返一を
 尋ねられ娘あえりては難風小舟をらる
 りれり死する覚悟を心ふくみ
 今朝見まは露わりの寺と念ふる折節杖を
 取つてあうりて入りの送る漁父に
 吾々の焼森て居るをたきて誰もあらね
 魚の集むる急き磯へゆるとゆりて
 磯へゆると見ると大風を魚はく此娘を
 見つけると語らば火命を尊ひ
 漁父は礼物をよき帰す誠は
 觀音の靈驗著く普門品の内

若為大水呀漂捕
 其名號即得淺處
 とゆ少女も違はれりて

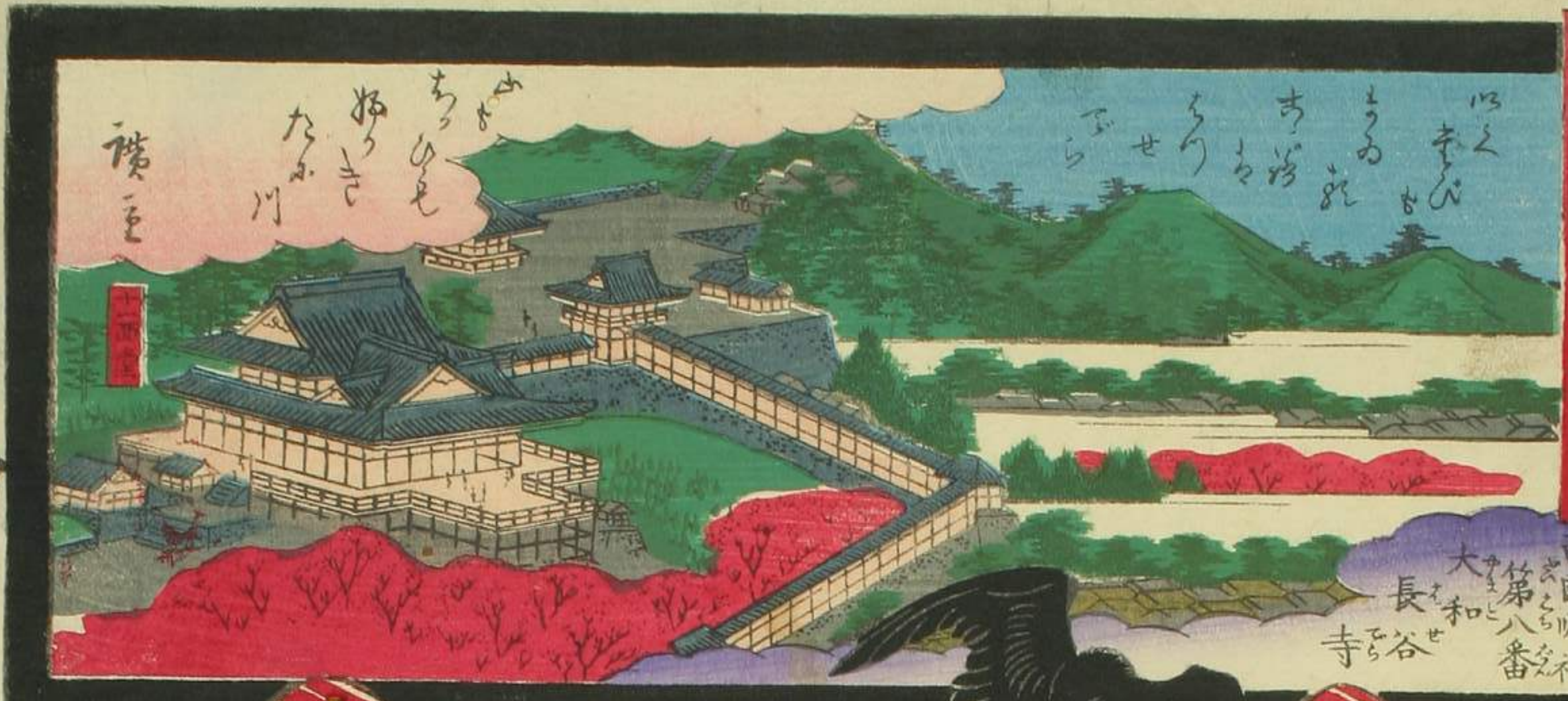
万亭應賀誌



横川彫竹

長門國

觀音靈驗記



春日の社司 中臣信近

後一條院の御代信近權辨蛇眼瘡を病て医療百計
手を盡せども本腰多末業病あるがゆゑ
神佛を祈ふに外ありとあり長谷寺乃観音
一信心念しるるに御寺の方より鳥
飛来り瘡のうらやう少き蛇
喰出ると夢見たり忽ち苦痛を
喰出ると夢見たり忽ち苦痛を

大悲の利益を報せんと長途の
田廬を建立せしむる外
未末男の靈驗中將姫沙
天驗唐馬頭夫人の天驗新羅國
照明王の右の利生吉備大臣大唐

源氏玉葛の尋ね人
人小逢一々験住吉
物語も長谷寺の
観音と戀路を祈ふ能
叶ふ玉とあり已ふ謡めも
足曳の大和路や大唐
寺も聞ゆる初瀬
寺も詣りて綴りるも
宜るるめ今古の天驗
奉るふらぬ形し
く頼め信むる

源氏玉葛の尋ね人
人小逢一々験住吉
物語も長谷寺の
観音と戀路を祈ふ能
叶ふ玉とあり已ふ謡めも
足曳の大和路や大唐
寺も聞ゆる初瀬
寺も詣りて綴りるも
宜るるめ今古の天驗
奉るふらぬ形し
く頼め信むる



万亭應賀誌



五十四

西國書

觀音靈驗記



西國順禮
第九番
和嘉奈良
南圓堂



開院左大臣冬嗣公
大織冠五代の孫長岡右大臣藤氏の子孫
繁昌を弘法大師の御尋りつたれハ
真言秘密藏のうら不空羅索の
像を撰進を然る處御堂建さる
うち薨ト玉の其御子冬嗣公
先功を後代に弘仁四年
其地へ一千餘の小觀音の
像を地中納め入時
春日大明神
匹夫の中ふ

交りあひく
土石を運びあひ藤氏の
繁昌を祝し御神致み
神陀落の南に
今堂建す
今堂祭えん
北の藤氏
石亭應賀誌

石亭應賀誌

観音靈驗記



西國 順禮 第拾番 山城 三室戸寺

山州綺田村 農女

昔綺田村の農夫常小
佛道を信し人の娘を
持り此娘知事あり
普門品を誦し
三室戸寺の観音を
信するも更み
救生をせし
一日村人蟹を
取て殺さんとせし
見家の乾魚とせし
換て其蟹を放り其父
耕作に出て蛇の蟹を吞を見つ
是を放ちやんとせし免れん哉と云ふ
蟹を放さ我娘をよんといふ吞し蟹を免れん
蟹のち去りて



其夜人化り
約束の為来りし
父が驚きを取あひ三日経て来ると答へる夜は去りしが
又三日を経て来り其時娘八間を閉て一信ふ観音經を誦日頃
信する三室戸寺を念するゆめ蛇の变化尾をのり三室戸を
破り入既小危き時にも忽然と数多の蟹現してその

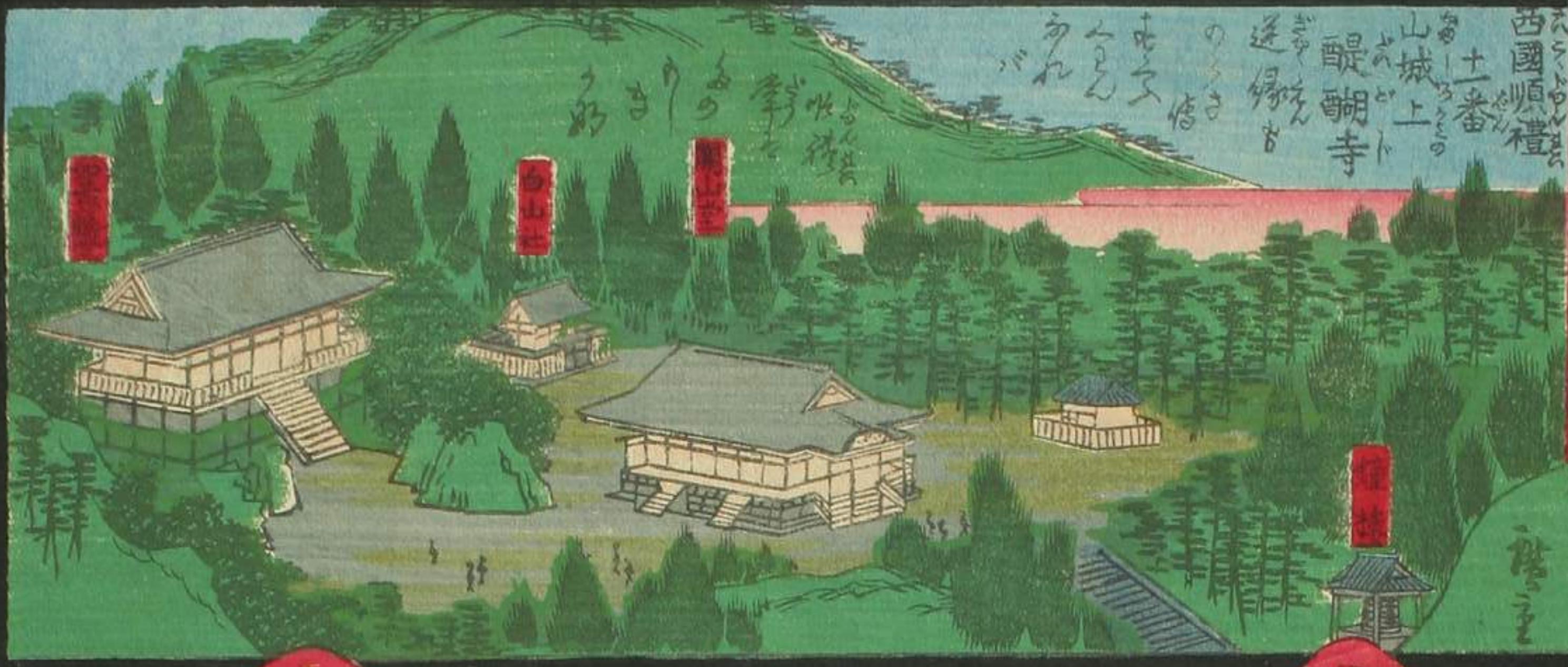
万亭應賀記

聖因

彫竹

日蛇を人斬て去る
是小因て其地を
蟹満
寺
即ち

觀音靈驗記



聖寶僧正

當山開基聖寶僧正、中興諸山の路を
 却るき川々木橋をこし、又舟を
 うかぐ往來に
 助けのなること

醍醐味水

一敷多
 役小角

能野より大峯より吉野へ出る
 山伏の峯入をいふ、其後
 大蛇出て人を噛むかゝる山峯入
 なること叶はじし聖宝僧正を
 以てかの大蛇を退治し、大峯より熊野へ出る
 とき、城逆の峯入といふ然るに聖宝僧正は觸
 惡瘡を生じ、苦痛なれば、準、祇陀羅尼を信じ
 けし、大悲の天妻小宇治郎笠取山小水より、是ハ三世の
 諸佛影向の醍醐經を加持せば、急ぎもたぐ
 浴せしと告め、バ聖宝僧正の教の通りゆらみ
 せし立敷、惡瘡愈す、あまふのり

此處小御寺を建立せり醍醐といふ
 其の靈水なるかゝる

跡と知りし

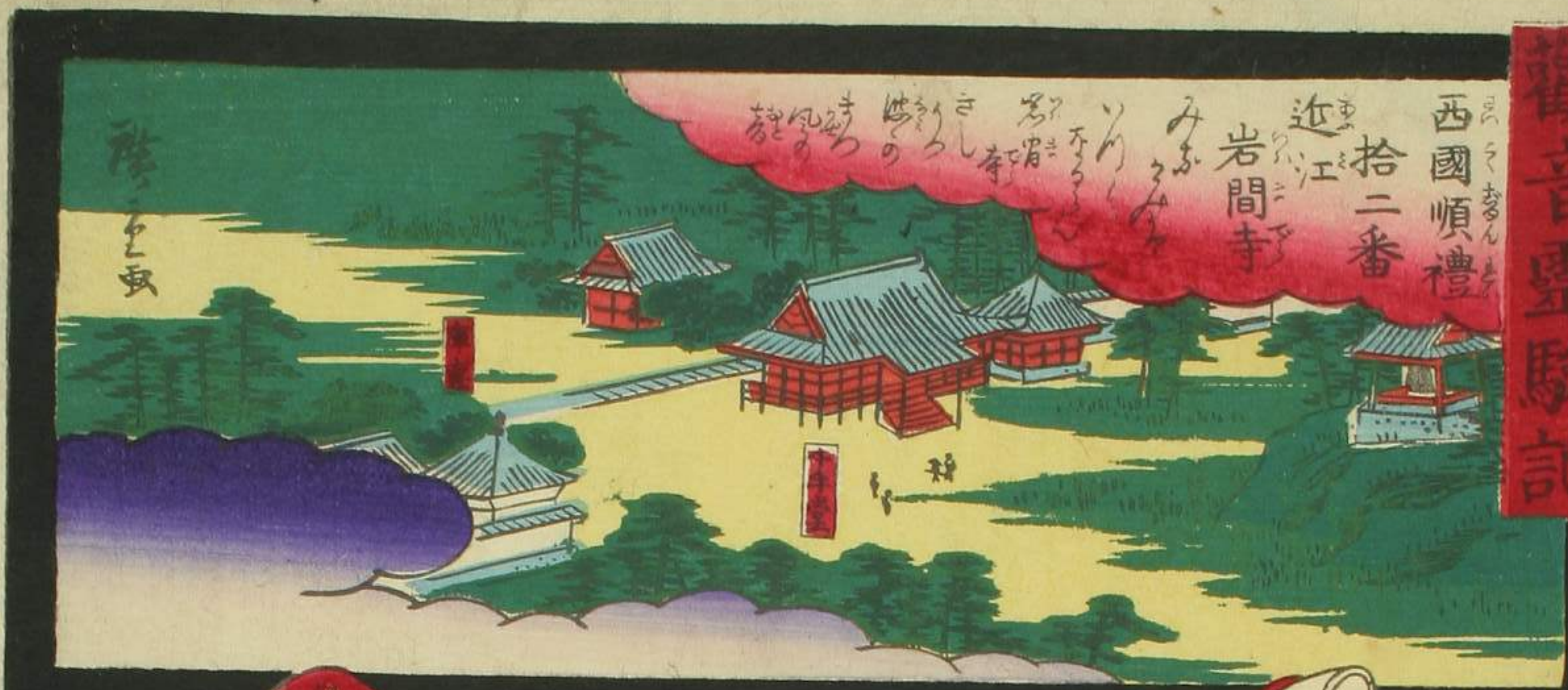


万亭

應賀誌

鹿竹

観音靈驗記



芭蕉翁挑青

芭蕉翁常小觀音經を信じて、此岩間寺の
薩埵を念じ、多開素幽棲乃風流を志せし
の終り、其の靈驗を蒙りて、未代よ
名と天下ふかやのせう紫式部ら
此邊りけ

石山寺の
觀音ふきの持念一
源氏物語の秀箸ゆり芭蕉
翁らこの山つきの國分山ふ
三年の間住る幻住菴の記をかき二隻
九旬う法華二十八品を一石小一字づ書んと



西國

厚竹

觀音靈驗記



良辨僧正

聖武天皇の勅命なりける良辨金峯山の

黄金を掘らんと欲し藏王権現に持念をなされ

藏王灵夢に告ぐまふ此山の黄金は弥勒出世の

用糸ありて盗み取らば汝の命は危し

教中より江州勢田郡ふたつの山あり

是は如意輪觀音の灵地なるをばかくみ

おのむを多行念ふと良弁散の如く

勢田ふたつ處石上ふたつ處を無んむ向ひて何人

るものと聞きたば我が山の主比良の神あり

如何にも茲ち

觀音の地

教

失ぬ

良弁

喜悦

其邊

菴を

結ひ如意輪の尊像を造り

程より奥州より黄金を貢し是より其の灵驗

其の時大伴の家持税しをり

主人は此の御代榮んや東ある陸奥山は金花咲

万高應賀誌



聖武天皇

觀音靈驗記



大津町杉女



三井寺ありとありゆる
 觀音は毎月舟縁日あり
 風雨の夜とくもかまきりあり
 参詣する人夫はけしき傍輩あり
 けしきも笑ひたり其頃大津中み瘧
 流行一人もあ病ひみ通るものまね
 あり既ふ家内三四十人ほど煩ひたり
 あり杉をうり片時も伏さばあふねなる
 皆佛力の尊き了派感トを皆信心を
 ありぬ又ある杉天井の上ある薪を
 ありはんとて換子を登りしやと遠の久し
 三十束の大薪薪落かり換子にけしき上より真倒ふ
 石臼の上から其上へ薪おちかきりしと聊の
 怪我も助けらるるこの不測さ身うちをぬらさん

見しき
 入置る覺ゆ
 尊像ふと移るる出
 信心をせしむる
 普門品の傷み
 隨落金剛山念
 彼觀音力不能損
 一毛トある

萬亭
 應
 賀誌

南傳貢山庄

観音靈驗記



西國順禮十五番
山城
今熊野

後白河院
御頭痛の御悩め
無野へ御幸あり
常の御頭痛の御悩め
無野へ御幸あり
常の御頭痛の御悩め
無野へ御幸あり



後白河院

常の御頭痛の御悩め無野へ御幸あり
常の御頭痛の御悩め無野へ御幸あり
常の御頭痛の御悩め無野へ御幸あり
常の御頭痛の御悩め無野へ御幸あり
常の御頭痛の御悩め無野へ御幸あり
常の御頭痛の御悩め無野へ御幸あり
常の御頭痛の御悩め無野へ御幸あり
常の御頭痛の御悩め無野へ御幸あり
常の御頭痛の御悩め無野へ御幸あり
常の御頭痛の御悩め無野へ御幸あり

万亭應賀誌



彫竹
萬亭

観音靈驗記

西國順禮

拾六番

山城京

清水寺

名所の

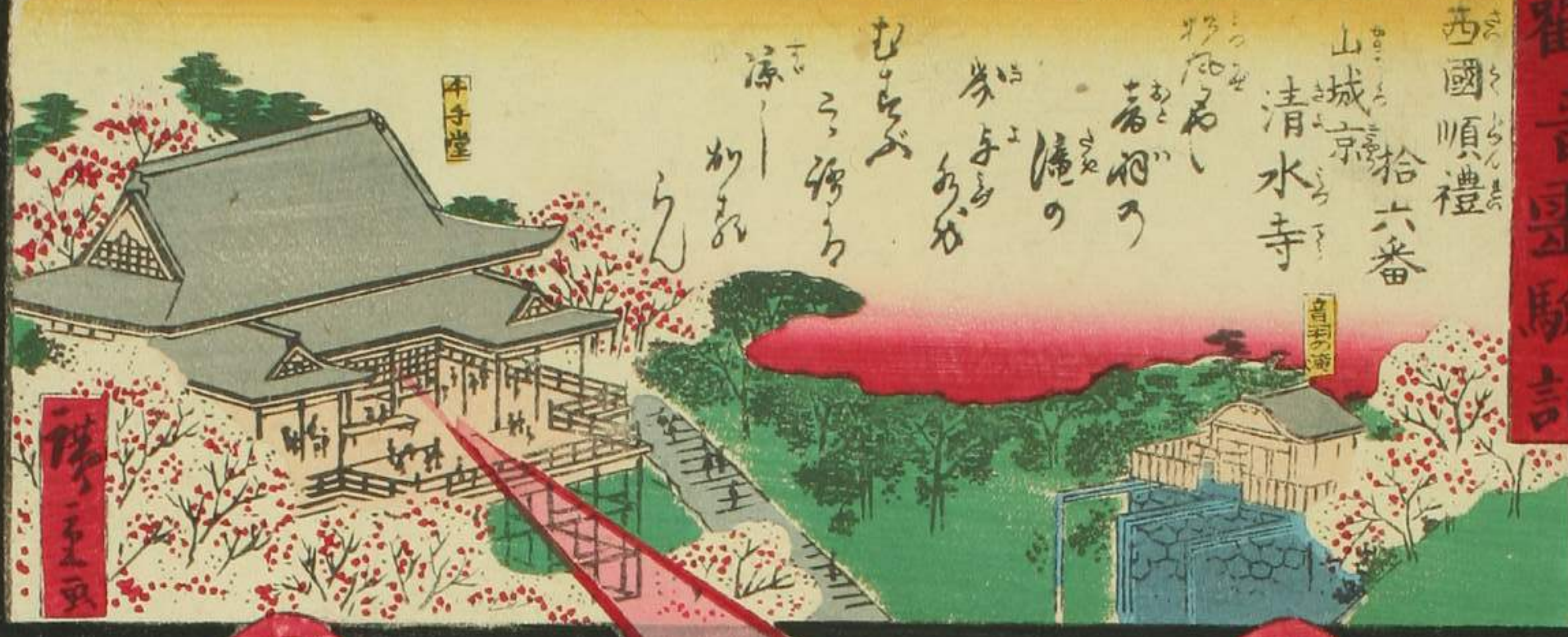
名所の

名所の

名所の

名所の

名所の



主馬判官盛久

盛久平家普代

八島檀浦の

員義經の

手小

生捕を録倉下されて
土屋三郎み預けらるる終小
由井濱あく誅せらるる空まう
まろみ浦華の上み流して法華経を
一信み念とられ大刀取の段段み
権りるやあめありむを御所へ訴へ
これ頼朝公みあふさの靈夢を見るもの
急き盛久を招く尋ねられ常み普門品を
信清水の観音を念ひの外他ありと答へ
これ頼朝公佛力を尊ひ一命を助けらるるのみあまを
研領をあえらるる念彼観音カ刀尋段々壞の
経文み能叶う靈驗あり

万亭應賀誌



西國

横川彫竹



觀音靈驗記



空也上人

十一面觀世音

天曆五年の春洛中にて外大疫疾流行て諸人の葬屋巷ふも多し萬人の悲しむらん方あり因茲空也上人ふく歎き自ら十一面の像を刻を丹誠強情に祈り尊像を車に乗て市中を牽くは信心をすめり一度牽くは町々々々み愈々れば諸人を大悲の妙智力をふく尊び終小當寺を開基してその佛跡を本尊とす疫流行の時觀音へ供したる典藥を疫人ふ吞むも獨りて平愈せし者ありを村上天皇聞るまはつと小御信心ありてその典藥を吉例とし毎歳元三小服玉ふり諸人も此例を

万亭應賀誌



西國順禮

一年の疫を免る為なり
祝ひ用る王服と号し

観音靈驗記

西國順禮

拾八番

山城

京

六角

堂



聖徳太子

此尊像ハ篋のつゝく終路の海上に漂ひ

来るを太子取上りて

御身を放さば持ぬ

其後天王寺御建立の

くめ良杖を尋ねぬ

折節あの地

未りぬ此像

を擲樹の枝

掛おき沐浴

取揚ぬる磨石

揚らむを

此地

有縁

太子の

尊此此地

尊此此地

君幸なる

ありぬ

雲た

あり急

ぬ人と

六角堂

一本

あり

あり

あり

あり

あり



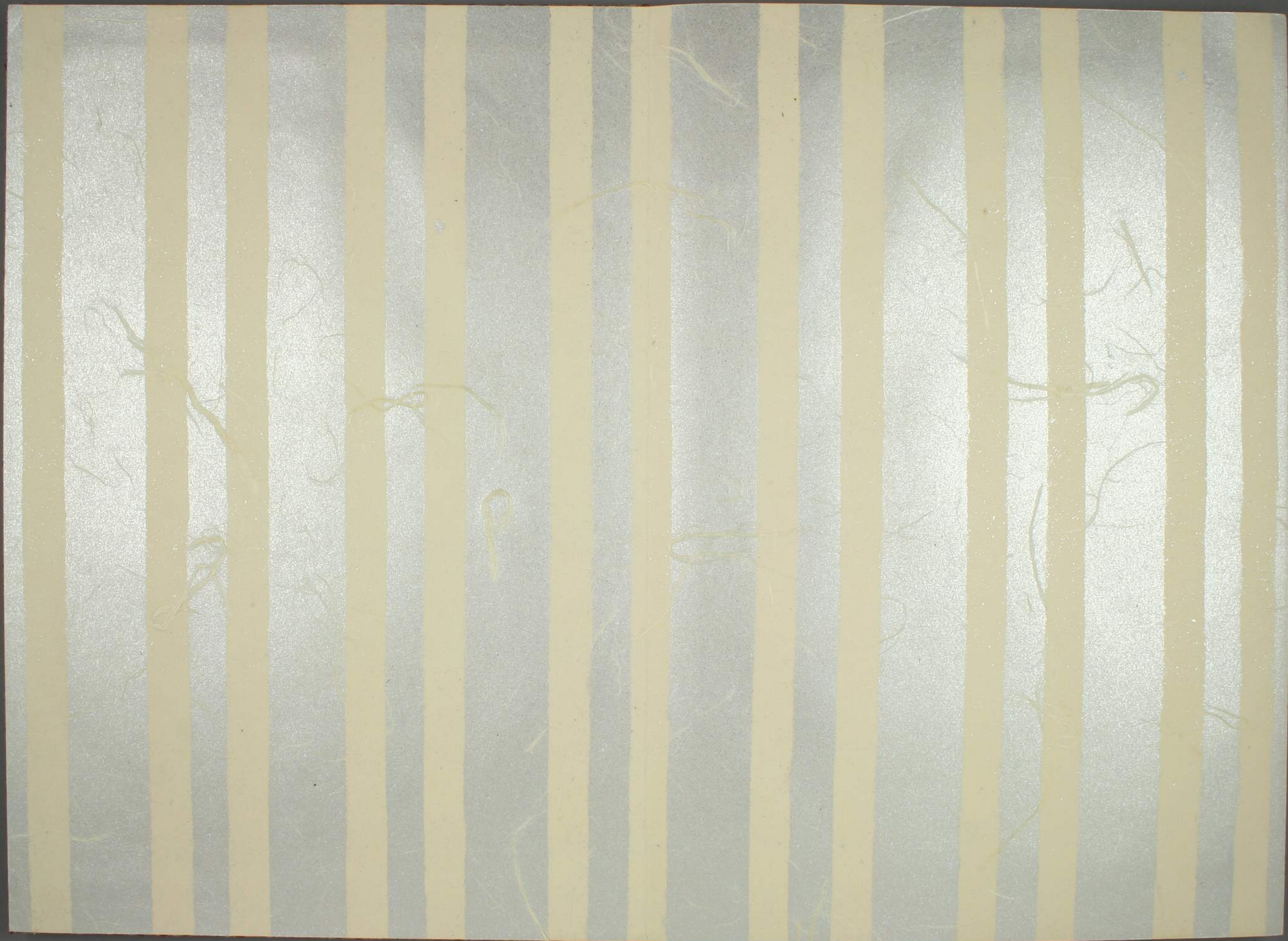
万亭

應賀誌

彫竹

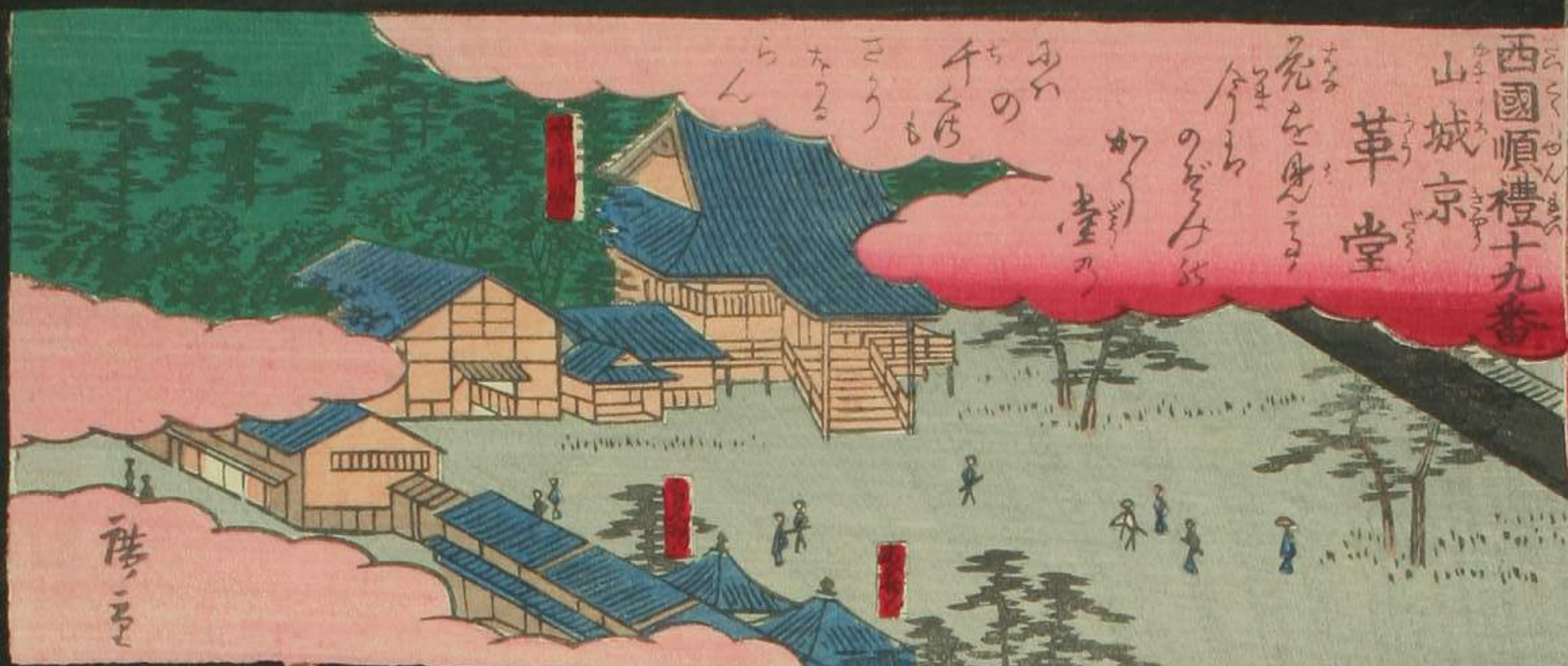
西國







觀音靈驗記



西國順禮十九番
山城京
革堂

東山天工集



京東山の辺岡寄とりの可住太
常はあの觀音を信し崇之朝暮と參詣のり
丹皮の龜山に住む姨の十死一生を告未と俄に
旅がらの用意をさるるふり女房密夫とかわらぬ
焼飯のあえ毒をのこ夫を殺さんとエミひさきと夢を
あらど大工先革堂參詣して姨の病ひ道中平安を
念しくさるる丹波路のちのむ堅木原より日暮て志の
坂を越んとするとき山陰より山賊二人立出て残らざ
利取と裸めて龜山にありその始末を
から姨が子と龜山音右門と
角かありてあはれ涙はまきまきその
着類を取久し小連立かき
見ゆゆの兩人の山賊の毒飯
を喰ひくその辺に血をたれ死
居るが故らぐき衣類ハ残らざ
うむせとあり普門品小

万亭應賀誌



呪詛諸毒

藥所欲害
身者念彼觀音力還
著於本人トあり此等の工
その女房
密夫
あはれ悪
瘡生トて
なご業死

觀音靈驗記



源箕上人
 胎のうちに母を苦しめ
 られ不祥の子ありしを
 山中拾得すむすれ
 養育す
 十五才の時巖山に登りて
 剃髮せし母の死を用い
 當山未だその練
 行言語未だ
 聊名利を
 好まば唯
 觀音を信ずる
 此山の主
 阿知坂神
 平地を音異のありさる大寺へ
 聞へられ遠く佛閣を御建せり
 萬應賀誌
 上人山小むむ
 七十四年承徳
 三年三月定申
 を結び
 百十七
 寂され
 更其容跡
 変せり諸
 人よく尊び
 拜せり體の腐
 せぬ者越後
 の弘智法印の
 聖なること
 疑ふべからず

観音靈驗記



西國順禮
丹波國 二十一番
穴穂寺

正観音堂

かろ
あふ
おの
十
切
産

龜山の城下
下女辰

辰女

悲つた者あり...
御録日...
かろ...
あふ...
おの...
十...
切...
産...

萬事
應賀誌

西國



西國順禮

攝津二十二番

總持寺

あや
なぐ
あつさ
あつた
そら
じろ
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた

山陰中納言
 中納言六歳の時父高房公と共に西国下向の途迄の渡り
 穂積の橋あり大なる龜をさして殺さんとすありのあり
 高房公常にお観音を信じて慈悲あり
 乳母御子を海中へ落しるる小順風烈しく終ふ見
 失ひしれ高房公悲しめるる遠く長谷寺の方を并み
 歩み我子再び出る千手尊像を彫り永く
 信仰せんと祈りありあま
 昨日故ち大亀御子を
 甲に乗て助け来し薩埵の
 利益を深く感悦し歩み
 急ぎ尊像を造らんとす
 是ふところにも龜あり
 御子の中納言御父の
 志願をつくと唐より
 梅檀香の霊木を
 取らせらるる変化の
 童子小彫り一
 尊像是るれば
 霊験殊小
 ありとなら



万亭
 應賀誌

西國順禮

觀音靈驗記

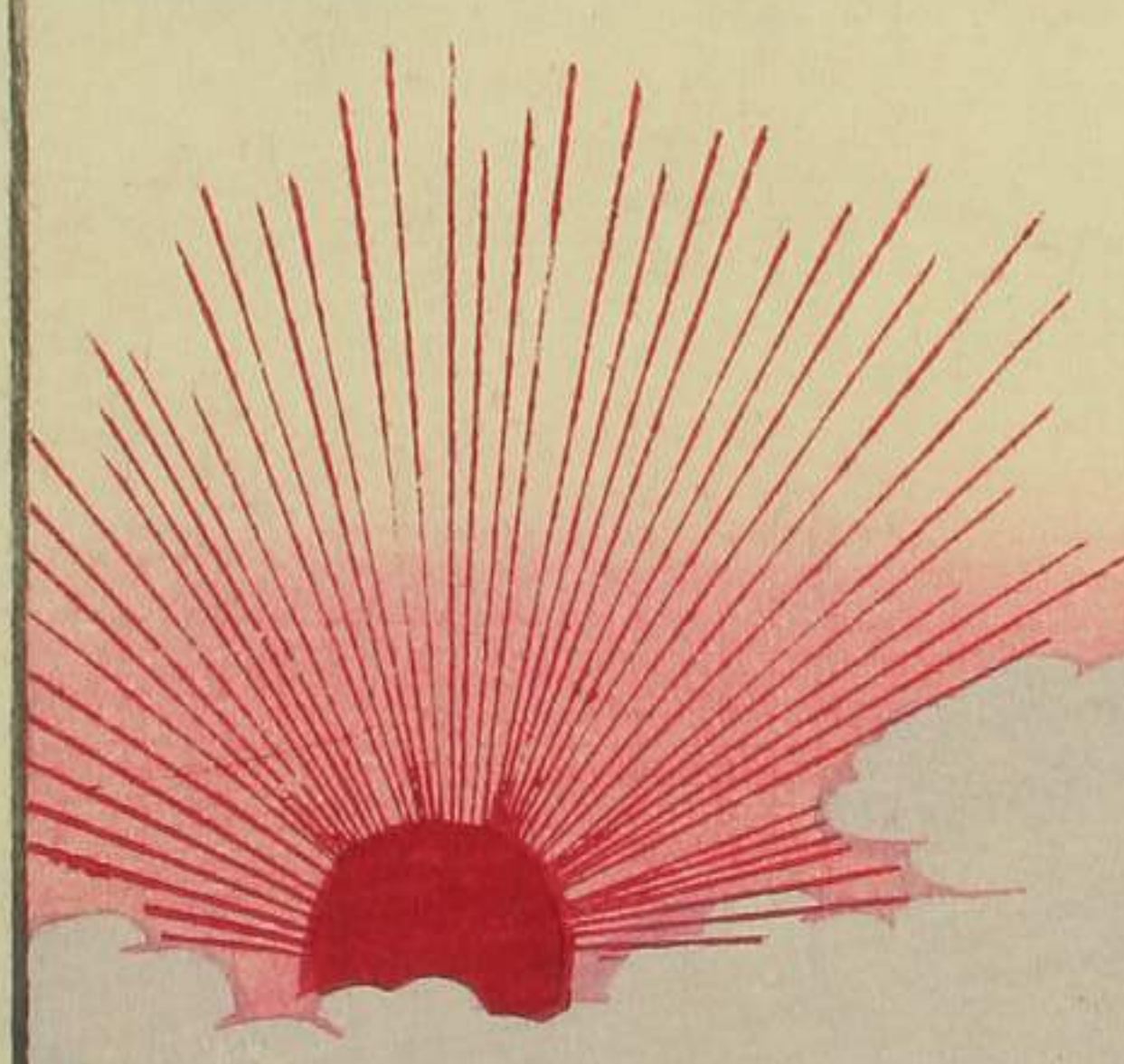


西國順禮
二十三日
津國
勝尾寺
乃
を
ら

百濟國王后
百濟國王の后ハ世ハ聞えたる
美人みく國王殊み愛し
みく何なるゆみや
り盛りの齡めて白髪
とるり種々と良菓
を用ゆれ

更み験ありし
或夜日本國
撰州勝尾寺の觀世音ハ
冥驗ありしを夢み見ゆひて覺るが
りや日本の方角を用て一心祈誓
若くハ其夜のうちに雪のどた頂瑠璃の
如き艶とあれば國王をドめ百官ゆいさるごと
そは報恩ゆと閑伽器。金鼓。金鐘の
三種を周文德揚仁紹とらるる商人の商人
み渡して日本へ送りたる其品
當山み納まり今猶什物と
なりたるあるまじき
の靈驗あり

万亭應賀誌



觀音靈驗記



多田美丈丸

多田は満仲公の當山に
行願万々を
堂舎に

園成奇

附の向まう

御子美丈丸を

中坊坊ふいば

學問をせ既

出家とならるるを諾いされバ

家臣仲光をりの討志し

仲光の子の幸壽を殺

代りてと美丈丸

かかして終小出家に源賢

僧都と号し多田院の

任持とあり

普門品を信

族り後世に

りれ又當山の

尊ハ上宮太子は前生舎衛

国小在り作りぬ十面の觀音

多田は我朝觀音の始也といふ

巡禮するもの重罪を滅し地獄

寺中け屋の内小藏其外の

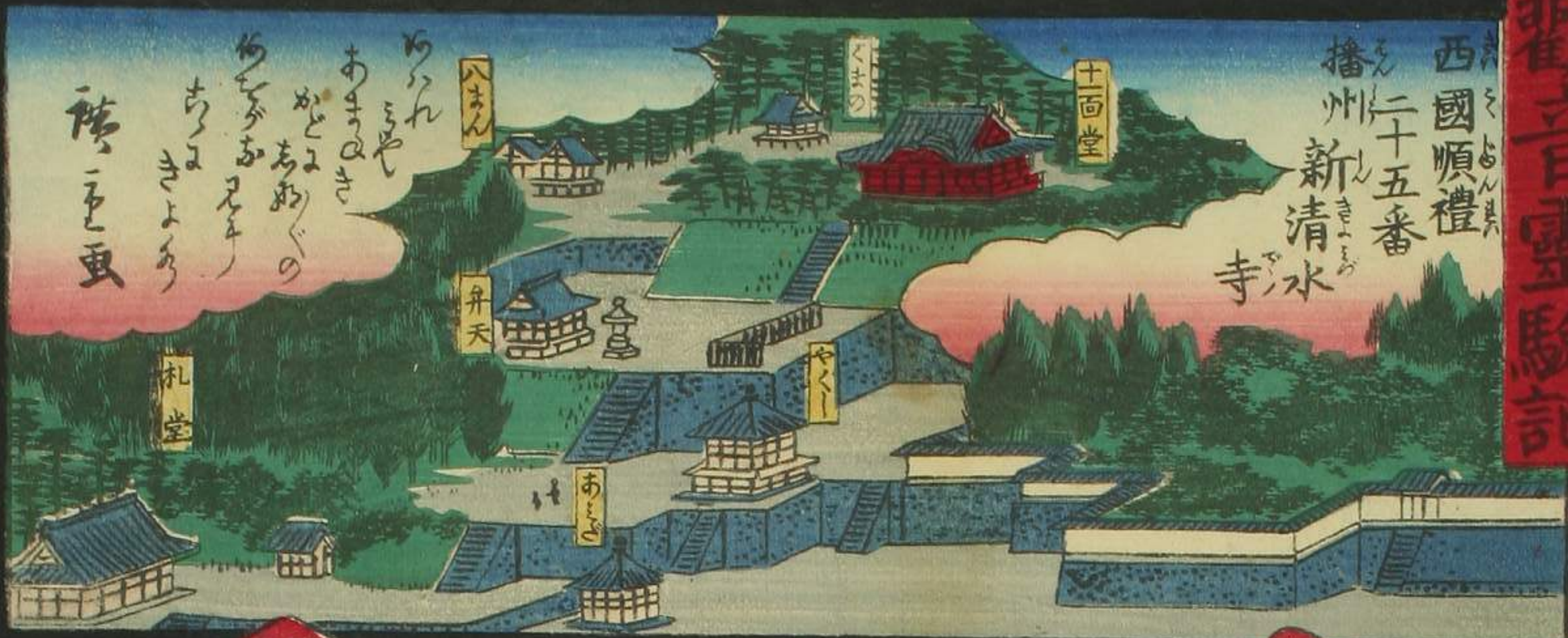
冥驗猶あら

万壽應賀誌



彫竹

観音靈驗記



赤松氏範
 當山ハ法道仙人の開基ホシテ
 堅固の天場あり金堂あり
 推古帝講堂ハ聖武帝薬師

堂ハ池二位殿大塔ハ祇園
 女御阿弥陀堂ハ頼朝公の
 御建立ニシテ則金輪聖王
 天下安全ヲ御祈願所ニトバ
 晝夜の勤行怠ることなく又灵驗も
 ありあうあり赤松氏範前関白師基と
 吉野めて打負身ハ救ヶ所ハ疵をらちり
 當国ハ飯り義詮ハ降りーの
 其後清水ハ戦ひニ終み
 自殺ニ歳五十七
 家臣伊藤藤民部
 今村五郎乙若丸
 を助けてハ薩加へ
 走る時ふく此尊像を
 祈りて敵ハ危難を
 まぬり退たることあり



万亭應賀誌

彫竹

觀音靈驗記



春
夏
秋
冬
花
山

播磨
磨
法華
山

西國順禮
二十
六番



法道仙人 一名空鉢

當山千手の大慈ハ法道天竺より持来り尊像あり
靈驗ニふらふあり法道常ニ觀音の宝鉢を飛し
人の供養をうく大化元年八月藤井
某禁中の

積て播磨灘を走る
此時法道の

鉢飛来りを供

米を乞ふ藤井が

是ハ禁中の米を私

施にがし強て乞

法道ハ杖人

天下の邪敵ありと
直をりて彼鉢空しく
山小飯るふあふひを千石の米俵雁金の
渡りてどくみみ山小飛行一や藤井驚き
山小登りつびにしなれば又残らぬ船小米ハ戻り
一俵南の河上ふあつるまを今米墮村とらふ孝徳帝
空鉢の法術を感ドあひて伽藍の
大施主となりむひてよりい

堅固の道場とあり

万亭

應賀誌

西國順禮

彫竹

観音靈驗記



西國順禮
播州二十七日
書寫山
ほあつと
おのり
まのり
みのも
なる

仲太小三郎

万亭應賀誌

仲太小三郎 本院左大臣時平公の孫時朝大納言の侍あり
此御家なる目出度御硯ハ御昇進の時あり
取出し御家なる目出度御硯ハ御昇進の時あり
取出し置て參内ありける御番守小仲太志をり
見度ありし十歳ありせらるる若君をよほし
彼硯を開き拜見の折御飯りと
△若君の御跡
を吊ひ
法華經を
誦し此大
悲の靈驗
を蒙り終ふ
當山を爾基
サト不思
議の因縁
あり

△若君の御跡
を吊ひ
法華經を
誦し此大
悲の靈驗
を蒙り終ふ
當山を爾基
サト不思
議の因縁
あり
△若君の御跡
を吊ひ
法華經を
誦し此大
悲の靈驗
を蒙り終ふ
當山を爾基
サト不思
議の因縁
あり
△若君の御跡
を吊ひ
法華經を
誦し此大
悲の靈驗
を蒙り終ふ
當山を爾基
サト不思
議の因縁
あり
△若君の御跡
を吊ひ
法華經を
誦し此大
悲の靈驗
を蒙り終ふ
當山を爾基
サト不思
議の因縁
あり



△若君の御跡
を吊ひ
法華經を
誦し此大
悲の靈驗
を蒙り終ふ
當山を爾基
サト不思
議の因縁
あり
△若君の御跡
を吊ひ
法華經を
誦し此大
悲の靈驗
を蒙り終ふ
當山を爾基
サト不思
議の因縁
あり
△若君の御跡
を吊ひ
法華經を
誦し此大
悲の靈驗
を蒙り終ふ
當山を爾基
サト不思
議の因縁
あり
△若君の御跡
を吊ひ
法華經を
誦し此大
悲の靈驗
を蒙り終ふ
當山を爾基
サト不思
議の因縁
あり



觀音靈驗記



開山 齋遠禪師
齋遠ハ殊ニ観音を信ト或大雪の日
法華經を讀誦セシ一鉢の時由多あり
既ニ飢死ニ及ぶ所アリ疾前ハ鹿の足あり
是ニ三淨肉ありと煮テ喰ヒ猶怠ラズ經を一信ニ
讀ミ所ニ里人食物を脊負テ来リ此大雪ニ

▲鹿坊いざどじ飢
あつゝとハあつゝの
とろろ飢老と
語ま六里人
うた

万亭應賀誌
□多ク其鍋の中を見まハ鹿の肉ハあり
の削屑のミアリ驚キミテ見まハ齋遠ハ懼レ
テ本尊を拜見ミハ尊体の腰あり下ハ削屑
痕ありミハ此大士吾食とあり飢死を救ヒ
あハ有難サと初念ニ其
削屑を尊体の痕ハ
押アハミハ痕ハ
あつ元のトク
ハ成相寺ニ
号シ今ハ
冥驗アリ

彫竹
西國

觀音靈驗記



西國順禮 廿九番 若狭國 松尾寺

陸

結城宗太夫

鴻の浦の漁夫宗太夫 八常の観音



夢中の白馬 宗太夫を 乗て虚空を走つて 當所未り

心地へ白馬の行衛を尋ねば 當山ふ登りし足跡あり さらハ大悲の助命あることを知つて 則馬頭観音を刺して 當山ふ山宗祭りを一條院開きて 勅ありて 堂舎を御建立のう人宗太夫は賜る 茲み おの宗太夫の子孫 永々此堂の主と 宗太夫 其妻子等が百ヶ日の吊ひの日みゆり 無支み家み飯とまきの 冥驗あり

万亭應賀誌



或時十七艘の夜船俄の大風み破損 行方を失ひ 宗太夫 妙羅利国へ吹流はして 一旦の命ハ助かるもれども 鬼女み捕はしてまこ

鹿行 曲る國

觀音靈驗記



松室仲算上人の兒

上人の事へり兒某ち其の容貌麗しくあは
法華經をよく讀み風与失りて捜せども
未だ下りて一時下部山ふ入て薪を
採らるふかの兒

「なるの梢あり
法華經を讀て
居よと御兒よ
あはむやと呼なれば如何
もも吾はとや仙人と
あはむや汝あまを師ふ
告よとあるや人急ぎま



云戻りて斯と告なれば上人其処へ往て對面を
茶の互み悦喜に限りて兒上人ふ向ひて
何卒師坊の琵琶を賜へり毎年三月
十八日竹生島ふかを神仙の會所と
其れ不携し一に其琵琶を樹ふかて戻り其翌
年其日上人懐し餘り船老竹生島を巡りるうち
虚空の音の琵琶の音聞へり頃て船のる人
落る物あり是を見其琵琶をば
尊びて終此島納め
今今空物と
成て

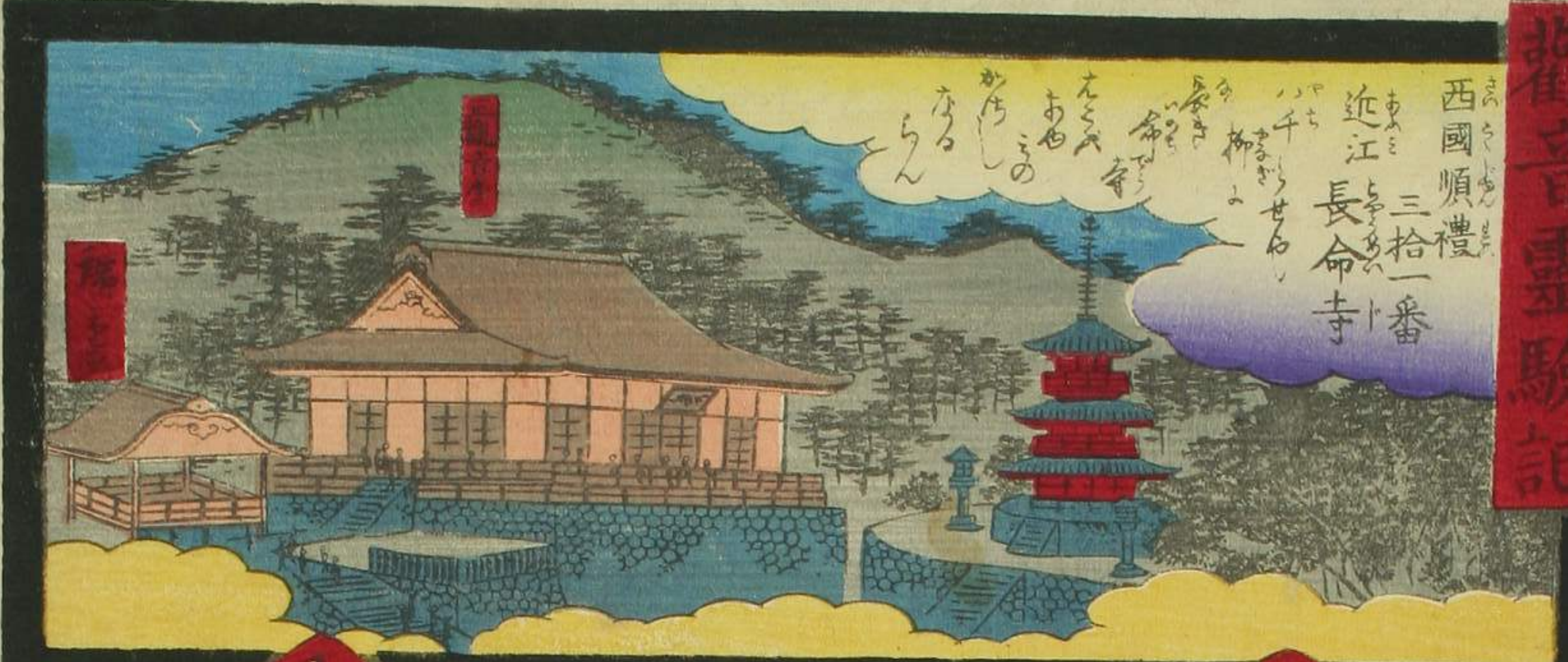


萬亭
觀音の應化
今今空物と
成て

應賀誌

觀音

観音靈驗記



佐原藤十郎

藤十郎、越前の者、父母を失ひ、
のち家財を賣拂ひ、路銀とて、
都へ上る。江島志賀の里、
盗賊、小出合衣類等、剥取、
水中へ捨らば、さら肌着の
うち、此長命寺の守佛
ありて、先づ光りを放ち、
漁夫の夜網、みかき、
あられ、藤生りし、佛カ
を尊び、終、長命寺
の住僧の弟子と
あり、普門品を
おとさし、誦、後、
堅田村、み堂を建、
その命の助りたる
守佛を安置し、猶、よき
靈驗を蒙り、さるとあり、又
富山の観音を、庵瘡を
守り、あひく信むる
者、は、
怪我
あり
あり

万亭應賀誌

豊國堂

観音靈驗記



西國順禮
三拾二番
近江
観音寺

みちの
あき
おん
み

候

人魚

我生天中受勝妙樂と唱へられ
聖君の慈力をりくえり物利天小
生世一の拜謝奉ると速て飛去ま



聖徳太子此石寺村を
日暮は通り多く巴蘆原のうち
より面を人々を下ハ魚るるもの
出て我前生み殺生を好ミ
業よゆゆかむ身とあまら何卒
尊聖哀を多きあひく當所ふ千手の
大悲を安置一伽藍を建ぬ人あつた
忽苦道を生ぬる且々天上小生

せんとの太子則堂をさて
千手の大士の像を刻し彼が
像を七日吊ひあひふ其満る日
のまらう太子小まらえ

万亭應賀誌



曲
彫竹

観音靈驗記

西國順禮

拾六番

山城京

清水寺

岩洞

岩洞

岩洞

岩洞

岩洞



主馬判官盛久

盛久を平家普代

八島檀浦の

負義經の

手小

△生捕と録倉下されて
土屋三郎小預けらるる終つ
由井濱の謀せらるる小室
一信小鋪草の上の世に法華經を
一信小念とられ太刀取の敵段を
ぬかれ頼朝公の御所へ訴へ
ぬかれ頼朝公の御所の靈夢を見るのうら
急ぎ盛久を召く尋ねられ予常小普門品を
信小頼朝公の御所の外他ありと答へ
これ頼朝公の御所の念被観音カ刀尋段々壞の
経文小鉄叶方靈驗あり

万亭應賀誌

豊國堂

横川彫竹



